

彙報

相愛大学総合研究センター研究プロジェクト活動報告

相愛大学総合研究センターでは、学内の様々な分野の教員の専門的知識を活用し、相互の交流を活性化することを目的に、共同研究プロジェクトを実施している。平成24年度からの3年間は「日本における諸学問の近代史」をテーマに共同研究を行い、近代の学問が西洋の学問の移入から始まり、固有の問題と取り組みながら自立してゆく過程を確かめてきた。その成果は平成28年3月発行の「総合研究センター報告書近代化と学問」にまとめられている。

だが、西洋文化の衝撃を受け止め、近代化への対応を迫られたのは学問の領域に限らない。

そこで、平成27年度から、「日本の近代－模倣と創造－」をテーマとし、学問に限定せず、近代日本の文化が確立する過程を多面的に明らかにすることを試みている。研究会は学内の教員を主要なメンバーとして学外からの講師も招聘し、学内外から参加者を募った。その成果の大部分を年度末の公開講座で紹介する予定であるが、第1回から第5回までの研究会の概要を報告する。

学内の教職員が気軽に参加できることをねらいとして、この3年ほど木曜日のキャンパスタイムに研究会を設定したが、同時刻に複数のイベントが開催されることが多く、毎回の出席者は、少数で固定している。開催日時・場所などを見直す必要がある。

第1回

報告者：松本直祐樹

(相愛大学音楽学部准教授)

テーマ：実験工房の音楽

日時：2017年7月27日(木)

午後1時20分～午後2時50分

場所：相愛大学3号館135教室

参加者：13名

1951年11月に読売新聞社主催で開催されたピカソ展の行事として、創作バレエ《生きる悦び》が発表された。この企画は詩人、瀧口修造が持ちかけ、美術、舞台照明そして音楽という様々な分野の若い芸術家が集まり実現した。その集団は「実験工房」と名付けられ、1957年まで活動した。

本研究の目的は、実験工房の作曲家たちによる創造を、単なる技法以外の側面から調査して、当時どのような意識で活動していたかを発見することにある。そのことにより当時と現在の共通と相違が明らかになるならば、その両者とも異なる第三の創造姿勢が生まれることが期待される。

まず作曲家と音楽評論、ピアニストという7名の *biography* を調査した。作曲家の態度は完全に二極化したこと－ 早々に筆を置いた者(鈴木、福島)、そして作曲に生涯を捧げる者(佐藤、武満、湯浅)－ が判明。次にその7名がどのような関係を構築したか、現存の資料や当時を知る人物からのインタビューにより、音楽の外にいる人物から興味の志向が決定されたことを見出した。実質的には瀧口修造から *surrealism*、実験工房の美術からはオートスライドや映画という *media* だが、情報共有が困難な時代に、限られた情報や *media* を議論し尽くしたことが、先述の作曲家の態度を決定する一因とも考えられる。突き詰めた結果、離れた人間もいる。これも妥協のない産物である。

ものをつくる人間は、無から有は創造し得な

い。先達の表現を追従発展、または批判解体することにより自己の表現を獲得する。しかし既存の手法で新たな表現を模索することは矛盾を孕み、先達の表現を「模倣」することに他ならない。

もし実験工房が時代的な役割を担っていたならば、Inter-media を実践したことだろう。美術と音楽が一緒になり合成するという、単なる「1+1」的な Combined-media ではなく、美術と音楽の「間」で発想することにより、新たな「創造」が生まれた。

言い換えれば凡人は「型を得て、型を捨てる」が、「型を捨て、型を得た」実験工房の作曲家たちは、ヤドカリが仮の殻を出るように、各人が無意識的に離散した。

当時と現在を比較、評価することは拙速だが、実験工房が得た meta-image を捨てた次世代を調査することが、今後の課題になる。

第2回

報告者：藤本繁雄

(相愛大学人間発達学部教授)

テーマ：近代から現在 健康スポーツの目指すもの－2021年マスタースオリンピック関西にむけて－

日時：2017年9月28日(木)

午後1時20分～午後2時50分

場所：相愛大学3号館135教室

参加者：12名

市民マラソンが各都市で開催されるようになり、多くの一般人が参加するスポーツ・イベントになっている。このスポーツについて、近代からの現在までの変遷、さらに将来の目指す方向について概観する。

戦後のスポーツは、青少年を中心に学校体育やクラブ活動の場で行なわれ、体育学としての

性格や競技性の要因が強かった。1964年の東京オリンピックを機に、スポーツが身近なものになり、“見るスポーツ”から“参加するスポーツ”に変わってきた。多くの青少年たちがスポーツに参加し、体力の向上につながって、わが国の高度成長時代を担ってきた。1990年頃には、ジョギングブーム、健康ブームが広まって、スポーツ人口がイッキに増加したが、その反面、肥満、高血圧や心臓病を抱えた人たちも参加するようになった。その結果、スポーツ障害などの事故が発生したり、スポーツ中の突然死も多発したりするようになり、社会問題になった。これらの背景のもと、日本医師会やスポーツ医学会では、スポーツ障害の治療や病気の予防だけでなく、健康の維持・増進を目指してスポーツに取り組む、“健康スポーツ”という概念が生まれてきた。

2000年からわが国では、すべての国民が健康で心豊かに生活ができることを目標に、「健康日本21」という健康づくり施策が進められてきた。この中心は運動と食事が基本になり、生活習慣病の予防のため、生活の質を改善するため、また健康寿命を延長するために、スポーツの関わる重要性が再確認されてきた。現在、わが国では「第2次健康日本21」が進行している。その目標は、高齢者の介護を見据えて、足・膝・腰の運動器障害（ロコモティブシンドローム）の予防と認知症予防のための対策が講じられている。その一方法として、スポーツをいかに利用して、予防に関与していくかが検討されている。

今後、2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに続いて、2021年には中高齢者を対象に、高齢者のスポーツの祭典にあたる第10回マスタースオリンピックが関西の広域で行なわれる。

高齢者社会の世界最先端を進む日本で、高齢化社会の中にスポーツをどのように取り入れて、どのように展開していくか、高齢社会でのスポーツが関わる理想モデルを構築していくことが、世界中から注目されている。

第3回

報告者：橋元淳一郎

(相愛大学名誉教授)

テーマ：時間論の系譜－人はなぜ時間を不思議なものと思うのか

日 時：2017年10月26日(木)

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学3号館135教室

参加者：11名

デカルトとニュートンによって導かれた絶対空間・絶対時間という概念が近代科学の基盤となって以来、時間と空間はこの宇宙を構成する絶対的で客観的な枠組みだと信じられていた。しかし、20世紀初頭、相対性理論の登場がその考え方を覆した。時間と空間はそれぞれの観測者が持つ相対的な枠組みに過ぎず、観測者抜きの客観的な時空などどこにも存在しない－これが現代の物理学が我々に突きつける事実である。

本講演は、時間と空間の実在性に疑問を投げかけるところから始め、過去の哲学者・物理学者の時間論を批判的に概観する。さらに相対性理論がそうした時間論を根底から揺るがす事実を明らかにしたことを、ミンコフスキー空間の幾何学に沿って、具体的に指摘する。

また、宇宙論と素粒子論の融合から導かれる加速膨張宇宙の未来像について、最近の研究による知見を紹介しながら、独自の観点で概観する。さらに、物理学には流れる時間を肯定する法則がないことを指摘し、イリュージョンとい

うキーワードによって、時間と生命現象の関わりに言及し一つの仮説を提案する。

第4回

報告者：石川玲子

(相愛大学人文学部准教授)

テーマ：近代日本とイギリスの芸術家たち

日 時：2017年11月30日(木)

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学3号館135教室

参加者：12名

江戸末期から明治、大正、昭和という、近代日本が形成され、発展を遂げていく時代、イギリスの芸術家たちは日本をどのように見、受け止めたのか。そのことを検証することで、彼らの心性を伺い知ると同時に、当時の日本の姿を捉え直すことができるのではないか。こうした関心から、ラフカディオ・ハーン、バーナード・リーチ、ヴァージニア・ウルフと日本の関わりを見た。

日本とイギリスの本格的な交流は1858年日英修好通商条約によって始まる。初代駐日総領事ラザフォード・オールコックは6年間日本に滞在し、帰国後、日本事情を紹介する『大君の都』(1863)を出版した。他にも、当時訪日した公人や一般人が日本の風俗や文化を紹介する書物を出している。これらに加え、イギリスの人々に日本の文物を知る機会を与えたのは、1851年と62年のロンドンにおける万国博覧会や各地で催された美術展であった。それらは日本の工芸美術が評価されるきっかけを作り、イギリスにおけるジャポニスムの隆盛を生むこととなった。

ラフカディオ・ハーンはその時代に日本を訪れて、日本文化を西洋世界に紹介した一般人の一人である。彼は1890年に来日し、日本人女

性と結婚、帰化して小泉八雲と改名した。日本での最初の随筆集『知られざる日本の面影』（1894）の序文に示されるように、当初からハーンは、近代化を目指す日本が西洋文化を競って取り入れ、古来の伝統文化を軽んじる傾向にあることを批判的に見ていた。彼は自分の観察と経験に基づき、失われつつある日本の伝統文化を英語で詳述して西欧世界に紹介するとともに、日本の古い民間伝説を発掘し、その再評価に寄与した。彼の最後の作品『怪談』（1904）はその成果の一つであるが、同時にハーン自身の精神遍歴を示すものともなっている。

陶芸家バーナード・リーチはハーンを愛読し、当時流行していたジャポニズムの影響を受けている。1909年に来日し、雑誌『白樺』の同人等と交流し、陶芸を学ぶ。やがて1920年に濱田庄司と共にイギリスのセント・アイヴスで窯を開き、陶芸を通して東西の融合を試みた。手仕事にこだわるリーチの姿勢の背景にはウィリアム・モリスらのアーツ・アンド・クラフツ運動と柳宗悦はじめ『白樺』の同人たちとの議論があった。

モダニズム作家ヴァージニア・ウルフは、ハーンやリーチのように自分の目で日本を見ることはなかったが、日本を訪れた友人の手紙をきっかけに1905年から翌年にかけて日本に強い関心を持ち、また後にアーサー・ウェイラーが翻訳した『源氏物語』の書評（1925）を書いている。その文章からは、ウルフが遠い昔の日本の女性作家紫式部にある種の共感を抱いていたことが読み取れる。

ハーン、リーチ、ウルフと日本の関わりを辿る時、その背後にイギリス社会からの疎外感と大英帝国の価値観やキリスト教思想への反発が、共通してあることに気づく。それは、彼らを東洋的な考え方や価値観を根底に持つ日本文

化に向かわせる一要因となったはずである。そのことを考える時、イギリスをはじめ西洋の社会を手本とした近代日本が帝国主義国家の道を突き進んでいったのは皮肉なことに思われる。

第5回

報告者：沼田潤

（相愛大学共通教育センター准教授）

長谷川精一

（相愛大学共通教育センター教授）

テーマ：「特別活動」・「総合的な学習の時間」における主体的・対話的な学びを促す教育方法

日 時：2017年12月21日（木）

午後1時20分～午後2時50分

場 所：相愛大学3号館135教室

参加者：9名

改訂学習指導要領（2017年）においては、子どもたちが社会の変化に積極的に向き合い、協働を通して現代的な諸課題を解決し、より良い社会や人生の創り手となる力の育成が重視されている。そして、各教科で身に付けた資質・能力を活用し、現実の諸課題の解決を目指す「特別活動」及び「総合的な学習の時間」における「主体的・対話的な学び」を通して、能動的に学び続けながら新しい社会を創造していこうとする態度を獲得させることが目指される。現在の「総合的な学習の時間」における国際理解の教育実践においては、外国文化や外国語の学習、外国人との交流など「楽しむ」「親しむ」ことが強調されているが、例えば、日本社会への外国人の受け入れに関して、国際結婚の場合を考えて異文化間理解を「自分事」として引き受けるよう促すような教育実践が必要である。

上記のように、改訂学習指導要領においては、「特別活動」及び「総合的な学習の時間」

に関しては、生徒が主体的に考え、自分なりの「答え」を探していく過程が重視されているが、一方、「特別の教科 道徳」においては、「内容項目」が提示され、内容項目にある価値意識をしっかりと育てていくことが目指されている。今後、「特別活動」、「総合的な学習の時間」、道

徳教育、さらには、各教科も含めた学校教育全体において、対話を重視した教育方法や、ディベート、ロール・プレイング、グループ・ワークなど能動的な学びを引き出す様々な方法上の工夫により、主体的・対話的な学びを生み出すことが重要である。

平成 29 年度 相愛大学人文学部公開講座

人文学を楽しむ

総合研究センターが後援した人文学部の公開講座「人文学を楽しむ」の概要を記す。

各講座とも相愛大学本町学舎 F 604 教室を会場として毎回午後 2 時から 4 時まで、人文学部の教員によって五回開催された。日程、題目および担当教員とその要旨は以下の通り。多くの聴衆があり、一定の成果をあげた。

第 1 回 6 月 10 日 (土)

「恋歌事情」 教授 鈴木徳男

俵万智は「心の揺れを伝えるためには、百パーセント現実に忠実である必要はない、ということ。わかりやすく言えば、嘘もあり、ということなのだ」(『短歌をよむ』2009)と述べている。講座では、古典和歌における虚構と真実について、時代を追って具体的な詠歌や作歌事情を提示しながら考えてみた。

I 和歌史の中の恋歌

現存最古の歌集『万葉集』二十巻の恋の歌は、雑歌・相聞・挽歌という三大部立のうち、約千七百五十首と数えられる相聞歌にみられる。雑歌のなかにも恋の心をうたうものは少なくなく、また巻十四の東歌も多くは恋をテーマとする。総歌数四千五百余の半ばは恋歌なのである。講座では、巻十五に載る中臣朝臣宅守と狭野弟上娘子を取り上げた(贈答歌六十三首)。宅守は越前国に流罪なり、妻の狭野弟上娘子と離れ離れになった。ふたりは和歌によって恋情を交わした。

次に、史上初の勅撰和歌集『古今集』(延喜五年 905)には、二十巻に各部立が設けられ

る。その構造・配列をいかなる方針により、歌集内の文脈をいかに構築するかが撰者に課せられた工夫であった。恋愛の諸相を表現する恋歌部、巻十一から巻十五までの五巻に恋歌三百六十首が収載される。四季部と同じく恋の進行に伴う時間的推移に従って配置し、恋歌の規範が示された。

II 二つの詠み方

・女房歌人(宮仕え人)と恋歌

清少納言(康保頃 964~万寿頃 1027)の私家集に伝えられた恋歌を例として、特定の相手と現実に交わした恋歌のあり方や表現をみた。

・題詠の確立 - 和歌史の画期

平安時代後期になると、恋歌の場合にも与えられた歌題のもとに作歌することが主流になる(「題詠」という)。康和四年(1102)内裏艶書合はその例。上卿や近侍の男性歌人たちと内裏や宮に仕える女房歌人に詠進させた懸想文の贈答歌を清涼殿において歌合の形で披講した。男の求愛歌と女の返歌、女の恨みの歌と男の返歌などから成る文芸的虚構の世界であり、巧みな切り返しを詠む女房歌人のうち、紀伊は七十歳くらいかと推定され、筑前は九十歳近い。

・藤原定家(1162~1241)と恋歌

題詠の発展は恋歌のあり方を変える。『百人一首』の「今こむといひしばかりに長月の有明の月を待ちいでつるかな」(素性)をめぐって、藤原定家は出典の『古今集』と異なりすぐ行くと約束して来ない恋人を主人公の女が数ヶ月間待ったと物語的な解釈をする。

III 物語の恋歌

最後に『和泉式部日記』の冒頭部を読んだ。女(和泉式部)は「夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ」暮らしていた四月のある日、かつての恋人、今は亡き為尊親王に仕えていた小舎人童が訪ねてくる。弟宮敦道から橘の花を預

かってきたのであった。女は「薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声やしたると」という歌で返事をした。宮から送られた橘は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今集・読人不知）を暗示している。あらたな恋のはじまりであり、作品は宮との一四五首に及ぶ贈答歌を綴りながら、約10ヶ月間の恋愛事情を描く。その恋の発端も見事な贈答歌をなしているのである。日記と称されるが、読者を想定した虚構を交えた作品であろう。

第2回 7月15日（土）

「阿部仲麻呂と王維」 教授 山本幸男

「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」

『古今和歌集』巻9の冒頭歌で知られる望郷の詩人・阿部仲麻呂の生涯については、杉本直二郎氏の悉皆的な調査研究があり、おおよそのところが知られるが、その中で、なお解明が待たれるのは、盛唐期の代表的詩人として李白・杜甫と併称される王維との関係である。

仲麻呂は698年生まれ、王維は699年生まれ（いずれも推定）と同世代。717年に留学生として入唐した仲麻呂は太学に学び、科挙に及第して左拾遺、左補闕を歴任。玄宗の覚えがめでたく、734年の帰国の機会を逸するが、その後、儀王友、衛尉少卿と昇進する。幼少時から才能をほしいままにした王維も科挙に及第し官途に就くが、左遷の憂き目に遭って地方に転出。帰京後の734年に宰相張九齡に抜擢されて右拾遺。これ以降、殿中侍御史、右補闕、左補闕、庫部郎中、吏部郎中と昇進を重ねて、官僚としての絶頂期を迎える。仲麻呂との交流が深まったのは、この時期であったと思われる。

この二人の関係を具体的に伝えるのは、仲麻

呂の753年の帰国時に王維が贈った送別の詩「送秘書晁監還日本国」の序文である。ここでは、中国と日本の交流の歴史を辿り、玄宗皇帝の徳治を讃えたあとで、仲麻呂の留學生活に言及し、「笈を負いて親に辞し、札を老聃（老子）のごとくに問い、詩を子夏のごとくに学ぶ」、そして帰国に当たっては、「金簡玉字もて、道経（道教の経典）を絶域（日本）の人に伝え、方鼎彙樽（皇室の先祖を祭る際の酒器）もて、分器を異姓の国（日本）に致さんとす」と表現している点が注目される。これによれば、仲麻呂は、老子を最高神とする道教を唐で学び、それを日本に伝えようとしたというのである。

当時の唐帝室では老子を祖先神と位置づけ、玄宗は『老子』の注釈書（御注）を著すなど、その顕彰に熱心であった。「唐大和上東征伝」によれば、仲麻呂が帰国する前に、鑑真を日本に招請することがあり、大使の藤原清河等はその旨を玄宗に願い出たが、許可の条件として道士（道教の僧侶）の同行を求められたので、「日本の君王は先に道士の法を崇ばず」と答えて断念した、というくだりがある。鑑真の招請は、日本にとって念願の課題であったが、それでも、道教の受容は認めがたいというのが、日本側の立ち位置であったわけである。結局、鑑真は非合法に來日を果たすが、玄宗にとって道教の受け入れ拒否は耐えがたい態度ではなかったかと思われる。そこで、仲麻呂である。彼は玄宗の寵愛を厚くしていた。その仲麻呂の帰国に当たって、玄宗は彼に道教の日本への伝道を託す事になったのではなからうか。親しく交流していた王維は、その事情をふまえ、序文に上記のような記述をなしたのではないか、と思われる。

仲麻呂の乗った船は、途中で嵐に遭って安南（ベトナム付近）に漂着し、道教の経典などは

海の藻屑と消え、玄宗の思いは実現しなかったが、九死に一生を得た仲麻呂は、再び都に戻り、唐土にあって帰らぬ人となったのである。

第3回 9月16日(土)

「初歩からの『般若心経』」 准教授 井上陽東
 アジア、とりわけ日本の仏教は大乗經典のひとつである『般若心経』によって支えられている、と言っても過言にもなるまい。大乗の根本思想は「空」であり、それを詳説すれば600巻からなる『大般若経』もあるが、簡単に説けば、この『心経』に包含される。誠に都合のよい經典である。

広く一般に流布しているのは玄奘訳のものであるが、彼の訳場にもいた慧立は『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』5巻を著し、師を讃仰している。後に慧立の記述をもとに彦琮は10巻本を完成している。

貞観3年(629)、長安を出発して一路天竺を目指した玄奘は、玉門関で同行していた胡人に襲われそうになったが、「経を誦え、観音菩薩を念じた」ところ、胡人は何もせず寝床にかえたという。ここでは玄奘が誦した経が何かはわからないが、さらに旅を続け、人影も草も水もないという莫賀延磧をわたる時も、「ただ観音菩薩と『般若心経』を念じた」とあるから、胡人に襲われそうになった時に誦した経も『心経』と考えていいだろう。

以後、伊吾に至るまで、観音菩薩を念ずることたびたびたすけられたのは『心経』あってこそこのこととも考えられる。

ところで玄奘は、この観音菩薩の原名について、『大唐西域記』巻3の烏杖那国の条で次のように述べている。この菩薩のサンスクリット名はAvalokita-iśvaraであるから「観自在」と訳するのが正しく、古く「光世音」「観世音」と

訳されたのは謬りである、と。

素朴な疑問として、玄奘の訳場にいた慧立が、玄奘自身が正しいとする「観自在」採用せず、謬りとした「観音」を採用したのはいかなる理由があるのだろうか。

『慈恩伝』巻1には、玄奘が蜀の病人から『心経』を得た経緯が語られるが、これは現存玄奘訳ではあるまい。玄奘以前には鳩摩羅什訳の『摩訶般若波羅蜜大明呪経』があるし、ここには「観世音菩薩」とある。玄奘が沙河を渡るときに誦えた『心経』が羅什訳だったとすれば、慧立が「観音」としたことも理解できないこともない。

一般に読誦されている『心経』は、649年に玄奘が訳出したものであるが、彼が訳出した『大般若波羅蜜多経』巻402「観照品」の一節よりも、羅什が403年に訳出した『摩訶般若波羅蜜経』巻一「習応品」の一節と酷似している。

『心経』の背後には翻訳の妙美を争った羅什と玄奘の姿が見てとれる。

第4回 10月14日(土)

「映像・写真とともに味わう イギリスの詩」
 准教授 石川玲子

本講座では、イギリスの代表的な劇作家・詩人であるウィリアム・シェイクスピアと17世紀の詩人ジョン・ダンの、ソネット形式で書かれた3篇の詩を写真や映像と併せて紹介した。「ソネット (sonnet)」とは、14行から成る詩の形式であり、13世紀にイタリアで生まれ、イギリスには16世紀に伝わった。押韻の構成によってイタリア形式(ペトラルカ形式)とイギリス形式(シェイクスピア形式)に分けられる。今回取り上げたのは、14行の行末がababcdcddefggと脚韻を踏むイギリス形式のソ

ネットである。

まず、シェイクスピアの生い立ちと作品を簡単に紹介した後、シェイクスピア・カントリーとして知られるストラトフォード・アポン・エイボンに残る生家や、町を流れるエイボン川、川のはとりの聖トリニティ教会と墓の写真を紹介した。その上で、初期の悲劇『ロミオとジュリエット』（1597）の第1幕5場、舞踏会で出会い恋に落ちた主人公二人が初めて言葉を交わしてからキスをするまでの、台詞のやり取りがソネット形式になっていることを見た。ジュリエットを聖者に、自らを巡礼に譬えたロミオの台詞を皮切りに、二人の恋の駆け引きが、比喩と言葉遊びを含みながら巧妙に展開する。その駆け引きの妙を味わった後、オリヴィア・ハッサー主演、フランコ・セフィレッリ監督の映画（1968）により、その場面を鑑賞した。次に、同じシェイクスピアの『ソネット集』（1609）から、不変の愛を讃えるソネット116番を、その豊かな比喩を味わいつつ読んだ。

さらに、「形而上詩人」ジョン・ダンの「死よ、驕るなかれ（Death, be not proud,）」で始まる有名なソネットを取り上げた。この詩は、放蕩の末にセント・ポール大聖堂の主席司祭になったダンの、死への恐怖に挑んだ宗教詩である。斬新な比喩と巧妙な論法を用いて「死は誰にとっても勝者であり、恐ろしいもの」という常識をひっくり返し、最後の句「死よ、お前は死ぬのだ（Death, thou shalt die.）」によって、死への恐れを克服する。この詩と共に、ロンドンのセント・ポール大聖堂、大聖堂とテムズ川の対岸とをつなぐミレニアム・ブリッジ、その先のグローブ座（シェイクスピア時代の劇場を再現したもので、現在シェイクスピアの劇が多く上演される）を写真で見た。

最後に、先に見たシェイクスピアのソネット

が、19世紀初頭の女性作家ジェーン・オースティンの『分別と多感』（1811）を原作とするアン・リー監督映画『いつか晴れた日に』（1995）の中で、効果的に用いられていることを紹介した。原作のタイトルは、ヒロインである姉妹の性格を表し、妹マリアヌは「ジュリエットのような」情熱的な愛に憧れる「多感」な娘である。彼女は、シェイクスピアのソネット集の小型本を携え116番の詩を朗読してみせる青年紳士ウィロビーと恋に落ち、やがて裏切られる。ソネット116番の詩句が、失意のマリアヌの口から漏れる時、その詩が賛美する愛の不変性とウィロビーの不実の愛の対照性がこの上ないアイロニーを生んでいる。

第5回 2月17日（土）

「心の世界を探求する」 教授 益田圭

心理学は「心の学問」「心についての学理的な研究」（平凡社『心理学辞典』）と定義される。心理学を意味する psychology は、ギリシャ語の psyche（魂・霊魂、心）と logos（論理、言葉、理性）の2つの言葉を合成したものである。言葉の語源がギリシャ語であることから分かるように、人間は大昔より人間の考え方や行動に影響を与える「魂」すなわち「心」について興味を持ってきた。心理学の源流を遡ればギリシャの2人の哲学者に行き着くとされる。1つはプラトンを源流とする理性主義の流れであり、もう1つはアリストテレスを源流とする経験論の流れである。

イギリスの産業革命によって、18世紀には人間の生活を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴って人間の性質や本性についての関心が高まっていく。19世紀に入ると生理学や進化論などの影響を受け、現代心理学が誕生する。現代心理学が誕生するためには人間内部の現象

である心的過程をどのように研究するかが大きな問題であった。この問題に1つの答えを出したのが精神物理学と、また現代心理学の祖ともいわれるヴントの実験心理学であり、科学的方法による現代心理学の幕開けとなった。

20世紀に入ると3大潮流ともいわれる行動主義、ゲシュタルト心理学、精神分析学が台頭する。行動主義は、心の内部の出来事はブラックボックスであり科学的研究の対象にはならないと考え、観察可能である「刺激」と「行動」こそが心理学の研究対象であるとして、ハトやネズミなどの動物を中心に研究をおこなった。ゲシュタルト心理学は知覚を対象に、個々の要素に還元できない、まとまりのある1つの「全体」が持つ構造について研究を行った。フロイトによる精神物理学は神経症など研究から身体

と精神との関連に注目した。人間の心の構造を無意識の領域を含んだものとして心の構造や力動を理論化し、治療理論や技法の開発も行った。

1950年代に入ると、コンピュータ・サイエンス、チョムスキーの言語学、ピアジェの認知発達理論の影響を受け、認知心理学が誕生する。人間の心的過程をコンピュータの情報処理モデルになぞらえて理解するという立場である。現在は心理学のすべての領域において認知心理学的アプローチは主要なパラダイムとなっている。また認知心理学の研究がAI（人工知能）の発展にも大きく貢献しているのである。

このように人間は長い時間をかけ、心の世界を探求し続けてきた。また今後も探求し続けていくであろう。

平成29年度 相愛大学人文学部公開講座

人文学を楽しむ

日頃より人文学部の活動にご理解ご協力を賜り、ありがとうございます。毎年恒例の公開講座を下記の通り開催いたします。

本学の教員がそれぞれの専門分野(文学・歴史・宗教・心理)の話を存分に語ります。

人文学の広がりと深さを楽しんでいただけるものと存じます。

本年度も引き続き、多くの方々のご来場を心よりお待ちしております。

6月10日(土)

恋歌事情



教授 鈴木 徳男

7月15日(土)

阿倍仲麻呂と王維



教授 山本 幸男

9月16日(土)

初歩からの般若心経



准教授 井上 陽

10月14日(土)

映像・写真とともに味わう
イギリスの詩



准教授 石川 玲子

2月17日(土)

心の世界を探検する



教授 益田 圭

入場無料(お申し込み不要)

※当日、満席になり次第締め切らせていただきます。 ※5回以上御出席の方には最終回に修了証をお渡しいたします。

※講座の妨げとなる行為をされた場合、御退室していただくことがあります。

日時 土曜日 14時~16時(13時40分より受付開始)

実施場所 相愛大学 本町学舎 F604教室

地下鉄御堂筋線「本町」駅C階段④出口より徒歩5分

お問い合わせ先:相愛大学人文学部合同研究室(平日9時00分~17時00分)

T559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1

TEL:06-6612-6252 E-mail:jinbungakubu@soai.ac.jp



主催:相愛大学人文学部 後援:相愛大学総合研究センター

教員免許状更新講習（高・中）

本学においては、教員免許更新講習実施の申請を行い、認定を受けているが、中学校・高等学校教員免許に関しては、選択領域「教科指導・生徒指導その他教育の充実に関する事項」について、2009年度に音楽科、2014年度に音楽科、2015年度に国語科、2016年度に音楽科の教員を対象として、講座を開催してきた。今年度（2017年度）には国語科に関して、3つの講座を開催した。教員免許更新制は、その時点で求められる教員としての必要な資質能力が保持されるように、定期的に最新の知識技能を身につけることによって、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目的として導入されたものである。

今年度の講習の各講座のテーマは、講座Ⅰ「古典を学ぶ－『枕草子』を中心に－」（担当：鈴木徳男教授、小野真龍元准教授、8月21日実施（台風のため、当初予定の8月7日から延期）、講座Ⅱ「師の説になづまざること」－宣長と真淵－」（担当：千葉真也教授、8月8日実施）、講座Ⅲ「大阪の近代文学」（担当：荒井真理亜准教授、8月9日実施）であった。

講習においては、貴重図書資料室「春曙文庫（しゅんしょぶんこ）」の見学、「枕草子」において清少納言が書き記している雅楽に関する生演奏を交えながらの解説、近世の国学や大阪の近代文学についての解説が行われた。

講習後の受講生へのアンケートでは、「久しぶりに大学の講義を受け、学生時代に戻ったかのような学問に対する面白さを感じ、とても刺激になった」、「至近距離で雅楽の生演奏を聴いて大変興味が湧き、字面だけでなく清少納言の感性を身近に感じることができたので、自分の

授業でも幅のある説明ができると思った」、「一日ゆったりとひとつのテーマについて考え、久しぶりに新鮮な経験ができてよかった」等の感想が述べられた。

各講座の内容は以下の通りである。

（長谷川精一）

〈講座Ⅰ〉「古典を学ぶ－『枕草子』を中心に－」

(1) 導入として『枕草子』の内容や作者清少納言の伝記を簡潔に述べた後、教材としての『枕草子』や最近の研究動向について説明した。その後、貴重図書資料室（4号館1階）に移動し、『枕草子』関連の古典籍資料を中心にした「春曙文庫」の展示を前にして、文庫の内容・価値などを詳細に解説した。参考資料として「古典籍資料展示目録」や展示一覧表ほかを配付。キャプション作成やわかりやすい展示をいろいろ工夫して下った図書館の関係各位に感謝したい。（鈴木徳男）

(2) 「雅楽と『枕草子』」と題して、相愛大学音楽学部非常勤講師（雅楽担当）の3名（小野真龍、林絹代、高木了慧）に1コマ分の時間を頂戴し、前半は小野による雅楽概論、後半は『枕草子』に関わりのある雅楽楽曲の演奏を行なった。概論部分では、「雅楽」の語の意義や歴史を説明したうえで、雅楽は日本人の宗教的・文化的精神性が凝縮された音楽であることを指摘した。次いで、雅楽における三種類の管楽器（龍笛、篳篥、笙）及び打楽器を実際の楽器演奏も交えて紹介し、西洋音楽との音楽性における相違点を紹介した。最後に、『枕草子』で触れられている雅楽楽曲について説明し、平調音取、越天楽、抜頭、落蹲、太平楽急といった雅楽曲の演奏を披露した。



雅楽曲の実演

(小野真龍)

- (3) そもそも「春曙文庫」は、『枕草子』の研究をライフワークにしていた田中重太郎博士（元相愛大学教授）の旧蔵書を核として成立した。文庫の性質をより深く知るために田中の学問について、拙論「国文学者田中重太郎の『枕草子』研究」（2016）を参考資料として講義した。略歴と『校本枕冊子』や『枕冊子全注釈』などの業績について解説、とくに「春曙文庫」との関わりを主に述べた。田中の研究とその態度はそのまま「春曙文庫」の特徴をよく示しているのである。（鈴木徳男）
- (4) 再び「春曙文庫」の展示を見学しながら、講座を振り返り、全体のまとめとした。最後に試験を実施した。その結果やアンケートによれば、相愛大学の誇る教育資産を活用した本講座の意図は、受講して下さった現役の先生方に理解されたものと思われる。教育現場に活かして下さることを期待したい。（鈴木徳男）



春曙文庫の見学

〈講座Ⅱ〉「師の説になづまざること」—宣長と真淵—

本居宣長の文章の中で教科書による取り上げられる『玉勝間』の一節を詳しく解説した。教えを受けた師の説であっても無批判に従わず、師の説をより正しいものに改めて行くべきだという宣長の主張は、大変魅力的なものであるが、その実相は、宣長や賀茂真淵の著書を詳しく読むことによってしか知ることができない。まず、受講者には余り馴染みが無いと思われるこの分野の研究状況を知ってもらうために参考文献を簡単に紹介し、さらに宣長と真淵の所持していた『万葉集』寛永版本への書き込みを画像で示した。学説だけではなく、筆跡を見ることで人物を身近に感じてもらうためである。

そののち、主に宣長の著作から「師の説になづまざること」に関わる部分を拾い出した。宣長による真淵批判、また、真淵による反論を紹介し（『万葉集問目』、『大祓詞後釈』）、さらに契沖の著作である『源註拾遺』・『万葉代匠記』を通して、先学への批判をためらわない精神が契沖以来の国学と呼ばれる学問の本質に関わるものであることを解説した。

なお、教員免許更新講習のために春曙文庫の展示を行っていたが、前日に予定されていた講座Ⅰが8月21日に延期されたので、講座Ⅱにおいても若干の時間を割いて前近代の写本や板本を見学する機会を設けた。ワークショップ形

式を取り入れてほしいという要望もあった。今回は、そのあたり工夫したい。(千葉真也)

〈講座Ⅲ〉「大阪の近代文学」

平成18年に公布・施行された「教育基本法」、平成29年に告示された「中学校学習指導要領」および平成22年告示「高等学校学習指導要領」を参照しながら、近代文学を学ぶ意義と国語教育における課題を確認した。「教育基本法」の(教育の目標)第2条の5には「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」とある。さらに「学習指導要領」でも、教材選択で配慮すべき点の一つに「我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」が挙げられている。このことを踏まえ、本講習では郷土の文学を教材として取り上げる意義と課題について検討した。

具体的な作品としては、織田作之助の「木の都」と山崎豊子の「船場狂い」を取り上げた。

人物の性格や言葉遣い、作品の舞台、時代背景などに着目し、〈大阪らしさ〉とは何かを考えた。ステレオタイプで語られがちな大阪だが、実は多様なイメージを有している。大阪の文学を取り上げる際には、大阪文化の独自性と多様性に気づかせることに留意したい。

本講習では、背景となる学問領域との関係を理解し、教材研究に活用することを意識して、大阪の文学の研究動向も紹介した。講義形式の講習で説明が多かったので、受講者の方から「アクティブ・ラーニングも取り入れてほしい」というご意見を賜った。今後の課題にしたい。(荒井真理亜)



会場の様子

教員免許状更新講習（幼稚園）

1. はじめに

平成 29（2017）年は、子ども発達学科に幼稚園教諭一種免許状ならびに小学校教諭一種免許状に係る教職課程が設置されちょうど 10 年目となる。あと数年すれば本学科卒業生も教員免許状更新講習（以下、更新講習という）の受講対象となる。母校で更新講習の開催を定着化し卒業生に安心を提供するため、そして大学としての社会貢献及び現場との協働等の観点から、平成 29 年度より幼稚園教諭免許状を対象とする更新講習を開講することとした。実際、本学と連携事業の実績のある大阪府社会福祉協議会保育部会や、年間を通して定期的に連絡・勉強会を共同で実施している大阪市私立保育園連盟加盟園からも強い要望も頂いていた。学生の実習・就職等でつながりのある教育・保育現場の信頼にも応えたいと考えた。

教員免許更新制は平成 21（2009）年 4 月 1 日から導入されたが、子ども・子育て支援新制度に伴い、幼保連携型認定こども園の保育教諭や幼保連携型認定こども園への移行の可能性を踏まえた認可保育所の保育士の受講ニーズがますます増大していた。また、特に幼稚園教諭や保育教諭に向けた内容を特化した講習（必修

領域、選択必修領域及び選択領域それぞれ）が不足していた。このような実情と、教員免許更新制の目的である「その時々で求められる教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指す」という点を踏まえた講座の開設を準備した。講座内容として、幼稚園教諭・保育教諭が今現場で抱える課題を設定にした必修領域、選択必修領域及び選択領域すべての領域を 5 講座で開設し、受講生が 5 日間の一括受講で免許更新講習を修了できるようにした。

2. 実施内容

【実施年月日】 平成 29 年 8 月 8 日（火）・9 日（水）・21 日（月）・22 日（火）・23 日（水）（5 日間）。5 日間とも、9:30～16:40 に講義・演習・筆記試験、16:40～16:50 にアンケート実施。

【会場】 相愛大学南港学舎（学生厚生館 S 307）

【定員】 100 名（申込みは先着順）

【講座運営事務局】 子ども発達学科合同研究室（和田・社／直島・松島・中西・曲田）。教職課程合同研究室とは別に、子ども発達学科合同研究室が教学課と連携して運営する体制で実施した。

【講座名・担当者等】 *全講座（5 講座セット）での受講。

区分	講座名	開講日	講師名
必修	今、園づくりに求められる幼児教育の在り方	8 月 8 日（火）	中井清津子
選択必修	園、家庭、地域との連携及び協働	8 月 9 日（水）	中西利恵
選択Ⅰ	子どもをめぐる社会問題と子どもの権利	8 月 21 日（月）	松島京
選択Ⅱ	子どもと環境	8 月 22 日（火）	曲田映世／進藤容子
選択Ⅲ	発達障害のある子どもへの支援	8 月 23 日（水）	直島正樹

【講座内容】各講座とも、現場の抱える課題を取り上げ、ここでの学びを持ち帰り、日ごろの保育に役立て幼児教育の質の向上につながるよう、以下のような内容で構成した。

○必修：今、園づくりに求められる幼児教育の在り方（中井清津子）

必須領域の「国の教育政策や世界の教育の動向」、「教員としての子ども観、教育観等についての省察」、「子どもの発達に関する脳科学、心理学等における最新の知見（特別支援教育に関するものを含む）」、「子どもの生活の変化を踏まえた課題」についての講義内容を設定し、幼児教育の今後を展望する新たな視点の獲得をめざします。特に新幼稚園教育要領の求めている方向性について理解し、各自の実践を通して協議を深め、「幼児教育の質的向上」を求めた幼児教育の在り方について考え、実践力の向上につなげていきます。

○選択必修：園、家庭、地域との連携及び協働（中西利恵）

乳幼児期における教育及び保育において「園、家庭及び地域の連携及び協働」として、園における生活が家庭や地域社会との連続性を保った展開、地域の自然、人材、行事や公共施設などの地域の資源を活用し、園児が豊かな生活体験を得られるような工夫、保護者が乳幼児期の教育及び保育に関する理解が深まるよう家庭との連携、小学校教育への円滑な接続に向けた連携などの取組が求められます。本講習では、それらのあり方や実践について考えていきます。

○選択Ⅰ：子どもをめぐる社会問題と子どもの権利（松島京）

近年の社会状況の変化に伴い、家庭内暴力・虐待、貧困、不就学、無戸籍など、子どもをめぐる社会問題は増えています。今後、幼稚園等

教育・保育施設における子どもと保護者に対する支援はますます求められるでしょう。本講習では、これら問題群の現状と社会的背景を整理したうえで、現場実践につながる、保育者に求められる支援のあり方（子どもの権利保障という視点の重要性）について考えていきます。

○選択：子どもと環境（曲田映世・進藤容子）

子どもを取り巻く環境について、音と食の視点から考えます。自然音を含む身の回りの音への感性を高め、子どもの目線と教育的視点から音環境を捉えます。また、食環境を子どもの発達の基盤を作っていくという観点からとらえ、幼児の今を見る視点を探ります。

○選択：発達障害のある子どもへの支援（直島正樹）

近年、幼稚園や保育所等の教育・保育現場において、発達障害のある子どもが増加していると言われます。各現場では、そのような子どもへの支援について、さらには保護者に対する支援のあり方が問われ、試行錯誤をくり返しています。本講習では、発達障害のある子どもを取り巻く現状、特性等を整理したうえで、子どもの「理解のしづらさ」、教育者・保育者に求められる子どもおよび保護者への支援のあり方等について考えていきます。

3. 実施状況と結果

本学ホームページでの開講告知前から複数の問合せがあり、申込み開始4日目（6月1日）の午前中には定員を超え、募集を締め切る状況となった（申込み期間は5月29日～6月17日で設定）。最終的には101名の受講者数となり、全員が全講座を修了された。その中には、学生の実習先、就職先等、本学とつながりのある園の先生も多数おられた。

各講座終了後のアンケートでは、「幼児教育の大切さを改めて実感した」「さまざまな見解に気づかされ、大変勉強になった」「自分の保育、子どもの育ち、子育て等、いろいろ考えさせられた」「今後の保育（実践）につながる内容であった」「グループワークにより皆さんの意見を聞きとても勉強になった」等の感想・意見が大多数であった。受講者の方々が「日ごろの自分の保育と向き合うことができ、子どもたちに寄り添う保育の大切さを再認識し、今後の保育で学んだことを役立てていきたい」という思いで終えられたことに、改めて本講習開講の意義と目的を確認した。また、実施初日には本学科学生らが、駅から会場までや食堂等への学内案内を担当した。学生スタッフに対し「学生の方の誘導があり分かりやすかった。とても印象が良かった。」といううれしい感想も付記しておきたい。

4. 今後の計画と課題

実施後に、講座運営事務局及び講師全員で振り返り会議を行い、実施の検証と次年度に向けた課題の抽出を行った。講義内容をはじめ、開講告知の時期・日程、選択講座数や事務作業のあり方等について経験・反省を踏まえ、次年度の計画を検討した。受講者の要望も汲み取り、①開催日程に土日を含んで設定すること、②選択区分に講座を増設すること、を改善点としてあげ準備を進める。増設する講座については、保育現場の課題としてニーズの高いカウンセリング分野とする。今後も、地域における教育研究機関としての存在価値を高める共に、卒業生等のリカレント教育機関としても継続的な学びの場を提供するため、教員免許状更新講習（幼稚園）開設の継続をめざす。

（文責：中西・直島）



講習風景

相愛大学研究助成報告

相愛大学研究助成 重点研究 A

人間発達学部子ども発達学科 中西利恵

【研究課題】

地域と連携した世代間交流プログラムの開発と実践を通した主体的学びの体制づくりに関する研究

【研究期間】

平成 26 年～28 年

【研究組織】

中西利恵、木村久男、進藤容子、直島正樹、実光由里子、石沢順子（H 26・27）、大島崇（H 26・27）、中井清津子（H 28）、松島京（H 28）、横島三和子（H 28）、曲田映世（H 28）

※平成 26・27 年は子ども発達学科専任教員 7 名で、28 年度は 9 名で研究を行った。

1. 研究の目的

地域と連携した次世代育成支援・世代間交流プログラムの開発と、実践を通した主体的学びの体制づくりを展開した。この取り組みは、本学の「つどいの里山（ビオトープなど各ゾーン）」や子育て支援室など特有の施設を活用し、実践的・経験的な学習環境での“かかわりの質”（コミュニケーション力）にポイントをおいた活動である。この取り組みを通して、学生（将来の保育者・教育者および地域と連動し地域を担う人材として）の発達をめざした。そして、多様な世代との交流計画の立案・実行・検証と参画した世代の発達をアシスト（つなぐこと）できる力をめざした実践力を養う。同時に、主体的な学びの体制の充実をめざし、4 年

間を通した段階を追った学びの体制をカリキュラムとも連動させる工夫もした。

また、展開する各種プログラムはすべて「実践教育の充実による先生力の育成」という共通目的をもち、子ども発達学科の教育目標達成をめざしていることを踏まえ、有機的に連携させ学修効果を高める体制づくりを試みた。

以下、字数の制約から主なプログラムについて報告する。

2. 研究目的の達成をめざし開発した主なプログラムと実施成果の概要

(1) 田植え体験・稲刈り体験（H 26～28 年度）

保育園児と学生が活動を共にすることで学生の意欲と能動性が高まり、子どもの目を通して自然への気づきが深まるとともに、子ども理解や関わる力が育っている。また、田植え・稲刈りの予行や粘土づくり、会場設営などの準備作業を通して、技術や段取りの伝承も行われるようになってきた。さらに、保育園児が田植えをした稲の成長を楽しみにして「相愛子ども田んぼ」を散歩コースに組み込み大学に来るようになったことで、山の畑のイモやつるを持ち帰って給食や遊びに活用するといった交流の発展も生まれた。学生によるビオトープ隊の活動にもつながっている。

(2) 相愛子どもわくわくあそび広場（平成 26～28 年度）

けん玉、ブーメラン、バルーンアート、一万個のドミノ、ボン菓子など地域で活動する外部講師の一流の技を学び活用するだけでなく、取材を通して子どもたちの生活文化が地域の様々な人々の想いと取り組みによって支えられていることにも触れることができた。取材は iPad を活用して行い、報告書を作成し、学びや情報の共有を図った。

企画準備にあたっては、参加者に楽しんでもらえるように内容を考えるだけでなく、安全面や衛生面にも気を配って進めることができた。各担当班では、リーダー・副リーダーを中心に4～1回生まで学生同士の学年間の段階を追った学びの仕組みを構築した。さらに、3回生以上はカリキュラムへの位置づけも試みた。全員でアイデアを出し合ってより良いものを作ろうと協力し、主体的に協働する姿勢が培われた。準備や片づけ作業などからも、一人ひとりが全体を見て臨機応変に動けるようになり、見通しをもって活動する力が身についた。広場当日は、参加者とスタッフが一体となり楽しみながら運営できた。学生は、子どもの笑顔に喜びを感じ、子どもの創造力や発想力の豊かへの気づきもあった。保護者の感謝や称賛の声に感動し、達成感を味わった。下級生は上級生の子どもや保護者との関わり方にあこがれ、上級生は下級生の積極性を頼もしく思う等、取り組みを通して学生のための繋がりが強まり、活動の継承と発展の教育文化が醸成されている。

参加者は近隣の小学校や保育施設の子どもたちとその保護者で、平成26年度182名、平成27年度163名、平成28年度118名であった。平成28年度に減少したのは、実施日が近隣の小学校全ての学校行事と重なったことが理由であると考えられる。平成28年度のアンケート結果では、とても楽しかった86%、楽しかった14%であった。感想には、手作りいっぱいの色々な体験をすることができ子どもも目一杯楽しむことができた、学生さんの元気で明るい姿が印象的でとても良かった、子どもへの対応が素晴らしく日々しっかり学ばれてるんだと感心した、などみられた。学生の子どもや保護者に対する関わりに高い評価を得られ、成果を挙げることができた。

(3) 1回生による小学生のキャリア教育事業 (平成27～28年度)

1回生が、キャリア教育をテーマに小学生とその保護者との交流活動を立案から実施まで担当した。次年度以降の実習に向けた実践的練習としても機能した。目的に合わせた計画の立案、同僚性を育む活動をめざした。学生のマネジメント力を高め、実践を通じた主体的学びが実現できたと考える。1回生ほぼ全員を対象に実施するという試験的实施を踏まえ、1回生時でマネジメントの基礎力育成をめざした実践的学習を、カリキュラム上で展開する試みを28年度より行っている。

(4) 住之江区社協・住之江区との連携(平成26～28年度)

ボランティア活動、講師、シンポジスト等の経験を通じて、学生が主体的に考え、他者に自分の経験・考え等を伝えることの重要性を感じ、学習・実践に活かす姿勢が伺える。これらの取り組みは、本学と住之江区社協との包括連携協定締結、住之江区との連携事業「あいあい相愛おはなしのへや」開設等にもつながった。「あいあい相愛おはなしのへや」は、学生によるおはなし隊を編成し、学生の学びに直結した運営を試みている。

3. 研究内容・成果の公表、普及の概要

研究内容・成果の公表方法は、特に学生の主体的学びにつながるよう工夫した。

(1) ラーニング・コモンズゾーンによる見える化の実施

子ども発達学科ラーニング・コモンズゾーンでは、「わくわく子どもあそび広場」開催に向けての準備経過や、その他さまざまな学生による地域と連携した活動についての情報発信を試みた。さらに、田植え体験や稲刈り体験などの

地域の保育園児との交流などについての情報発信も写真を活用して行った。住之江区との連携事業についてもフォトレーター作成や学科ブログを活用した。

効果としては、ラーニング・コモンズゾーンでの情報発信は、学生の学びのプロセスを可視化すると同時に、地域の人材資源を発掘し連携を図れるようになるための知見を他の学生にも広めることにつながった。さらに、オープンキャンパス等訪問者に対し、学生が子ども発達学

科教育の特徴について語れるようにもなった。情報発信を通じた学生の主体的な学びや省察が見られた。

(2) 学会発表

平成 27・28・29 年度の日本保育学会において、研究分担者が連名で研究成果について継続して発表した。その他関連学会においても単独・連名で研究発表を行っている。

(文責：中西)

特別演奏会助成公演

「ハラウイ～愛と死の歌～」

稲垣聡（ピアノ） &

林千恵子（メゾ・ソプラノ）

音楽学部教授 稲垣 聡

平成 28 年度相愛大学特別演奏会助成公演の
演奏会報告。

1. 開催目的：20 世紀音楽の楽曲研究と演奏。
作曲技法と音楽語法、および声楽作品における
文学性と音楽語法「詩と音楽」の関係性、また
演奏様式・効果の可能性等を研究。

2. 日時：2017 年 3 月 6 日（月） 19:00 開演

3. 会場：ザ・フェニックスホール

4. 入場料：一般／3,000 円 学生／1,500 円

5. 来場者数：169 名

6. 出演：ピアノ／稲垣 聡

メゾ・ソプラノ／林 千恵子

7. 曲目：

(1) リヒャルト・ワーグナー＝フランツ・リス
ト

Richard Wagner (1813-1883)

= Franz Liszt (1811-1886)

楽劇「トリスタンとイゾルデ」より

“イゾルデの愛の死”（ピアノ独奏版）

“Isoldes Liebestod” aus Tristan und Isolde

(2) ガブリエル・フォーレ [詩：C.v. レルベル
グ]

Gabriel Fauré (1845-1924)

[Poésies de Charles van Lerberghe]

イヴの歌 op.95 (1906-10)

La chanson d’Eve

I. 楽園

Paradis

II. 初めの言葉

Prima verba

III. 燃える薔薇

Roses ardentes

IV. 神のなんと輝かしいこと

Comme Dieu rayonne

V. 白い夜明け

L’aube blanche

VI. 活ける水

Eau vivante

VII. 起きているの 私の太陽の香り

Veilles-tu, ma senteur de soleil . . .

VIII. 白き薔薇の薫りのうちで

Dans un parfum de roses blanches . . .

IX. 黄昏

Crépuscule

X. ああ 死よ 星のかげらよ

O mort, poussière d’étoiles

* * Entracte * *

(3) オリヴィエ・メシアン [詩：O. メシアン]

Olivier Messiaen (1908-1992)

[Poésies de Olivier Messiaen]

ハラウイ～愛と死の歌～(1945)

Harawi ~Chant d’amour et de mort~

I. 眠っていた街 お前

La ville qui dormait, toi

II. おはよう 緑の鳩よ

Bonjour toi, colombe verte

III. 山

Montagnes

IV. ドウンドゥ チル

Doundou tchil

V. ピルーチャの恋

L'amour de Piroutcha

VI. 惑星の反復

Répétition planétaire

VII. さらば

Adieu

VIII. シラブル

Syllabes

IX. 階段が復唱する 太陽の仕草

L'escalier redit, gestes du soleil

X. 星の愛鳥

Amour oiseau d'étoile

XI. カチカチ 星たち

Katchikatchi les étoiles

XII. 暗闇のなかに

Dans le noir

～アンコール～

オリヴィエ・メシアン [詩：C. ソヴァージュ]

Olivier Messiaen (1908-1992)

[Poésies de Cécile Sauvage]

3つの歌曲より II. ほほえみ

Trois Mélodies II. Le sourire

8. 調 律：土井 政人

9. 音楽助手：美越 希

10. 訳 詞：澤田 直

11. 字 幕：舞台字幕／字幕 まくうち

12. 字幕操作：上野 詩織

13. 制作協力：おふいすべガ

<http://office-vega.net>

近・現代作品、とりわけ20世紀音楽の楽曲研究と演奏は、私の研究課題の一つである。20世紀音楽は、多くの作曲家の探求によって様々な音楽語法（作曲技法）や表現方法などが多彩である。また同時に20世紀音楽は、それまでの各時代の音楽様式と変革の過程を経て、西洋文化における音楽芸術の歴史と伝統を包括した分野でもあるといえる。

今回の演奏会を開催した経緯として、メシアン「ハラウィ～愛と死の歌～(HARAWI～Chant d'amour et de mort～)」を2016年3月Paris、4月東京、埼玉にて演奏する機会があった（共演：林千恵子）。しかしながら、私自身がこの作品に初挑戦であり、また準備期間が充分にとれず作品の内容に深く踏み込み切れずに終わってしまったため、もう少し時間をかけて研究したいとの願いと、日本国内はもとよりフランスでも演奏される機会が極めて少ないことから、地元大阪で演奏する意義も理由の一つであった。

この「ハラウィ」の作曲家オリヴィエ・メシアン（Olivier Messiaen 1908-1992）は、20世紀を代表するフランスの巨匠作曲家であり、またパリ国立高等音楽院作曲科教授として数多くの優れた国際的作曲家を世に輩出した教育者としても知られ、後世の現代音楽界に多大な影響を与えた一人である。彼自身「カトリックの信者として、生涯を通じて自分の信仰を深め努力してきた」と公言しているように、彼の作品はすべて神学的精神に基づいたもので、オーケストラ曲、ピアノ独奏曲、室内楽、声楽曲、オペラと多岐におよぶ。

『愛する者は必ず死を迎えなければならない』この「愛と死」というテーマは、これまで多くの芸術家たちにインスピレーションを与え続

け、ワーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルデ」が最も有名であるが、メシアン自身もトリスタン伝説に強い影響と啓示を受けて、『ハラウイ』ケチュア語（ペルー古語）で恋人たちの死を持って完結するペルー伝統による“愛の歌”を、ピアノと声楽（女声）のために12曲からなる連作歌曲として1945年に作曲、声楽作品としては約1時間におよぶ最も大規模なものである（この作品ではイゾルデをピルーチャと呼んでいる）。演奏会前半には、「ハラウイ」と同じく作品の精神性から考え合わせて、ガブリエル・フォーレ（Gabriel Fauré 1845-1924）の晩年期の連作歌曲「イヴの歌」（生と死）と、同じくトリスタン伝説に基づいて作曲されたリヒャルト・ワーグナー（Richard Wagner 1813-1883）楽劇「トリスタンとイゾルデ」より“イゾルデの愛の死”（愛の死）をフランツ・リスト（Franz Liszt 1811-1886）によるピアノ独奏版にて取り上げた。声楽作品を取り上げる際、歌手の声域と声種を踏まえての選曲は、時に困難を要するものである。

“イゾルデの愛の死”は、この楽劇の終幕ラストにイゾルデによって“愛の美と官能”が高らかに歌われ幕を閉じる壮大な曲である。ピアノの魔術師リストならではの色彩豊かなピアノ独奏版は素晴らしいが、通常この曲は長大なストーリーと音楽の展開後のフィナーレに歌われるわけで、その凝縮された音楽と深層性のために、演奏会の冒頭で弾くことの精神的な負担がかなり重く正直しんどい！！しかし、当夜のプログラム全体を暗示した曲であり、演奏会全体の前奏曲とした。なお、リストによる独奏版の前に、この楽劇の前奏曲の冒頭に現れる主要モチーフを付け加え演奏した。



G. フォーレは、フランス近代音楽発展の貢献と音楽教育者としても知られる。歌曲は生涯にわたり書き続けられ、ポール・ヴェルレーヌなどのフランスの詩人の作品をテキストに用いていたが、この「イヴの歌」ではラファエル前派美学の煌めく色彩と神秘性から影響を受けたベルギーの象徴派の詩人、シャルル・ヴァン・レルベルグ（1861-1907）による同名の詩集全96篇より、作曲家自身が任意に選択し再編成した10篇を用いて1906-10年に作曲された。この曲では、例えば「1. 楽園」冒頭にみられる、ピアノの主要な和音のみとレチタティーヴォのような歌に象徴されるように、全体を通じて語り口調に近い歌唱と、音数をできる限り減らし、それまでのフォーレには見られなかった簡潔な書法にまとめられたピアノによって、ヴァン・レルベルグの流麗な言葉と深い内面的な色彩が、フォーレの音楽とともに色濃くなっており、「世界の始まりとイヴの目覚め」「生命の美しさ」「誘惑」「闇に包まれた楽園」「死と永遠の憩い」をゆったりと時を刻みつつ曲線を描くように、瞑想と幻想的な世界が描かれている。



多くの作曲家が様々な詩人の詩と、その世界観にインスパイアされ声楽作品を残しているのに対して、O. メシアンについては全く事情が異なる。なぜならメシアンの場合、彼のオペラを含む声楽作品のテキストは、ほぼ彼自身が書いているからである。モチーフの展開とそれらの断片が繰り返し現れる巧みな編集技術など彼特有の作曲技法と音楽語法、カトリックの精神に基づいた独自の世界観ゆえに既存の詩を用いることが困難であるのだろう。また、メシアンの父がシェークスピアの研究家、母が詩人という文学的影響、そして音楽と文学の関係性を生涯探究し続け自らテキストを書き続けたR. ワグナーの影響も考えられる。この作品では、作曲者の母国語であるフランス語を基調としてケチュア語や擬音が多く含まれており、時に一種の儀式的なシーンも感じさせる。しかしながら、テキストの内容は文学性と精神性を深く感じるものの、あまりに抽象的すぎて言葉がいったい何を指し示すのか理解には困難を極め、フランス語・ケチュア語を超えた、いわば宇宙語（もしくはメシアン語！？）と捉えるべきなのか……。声楽作品の多くが、詩の情景や背景、また主人公の内面をピアノが歌に寄り添う形で書かれることに対して、メシアンの場合はそれらに加えて作品の冒頭「I. 眠っていた街 お前」にみられるような、言葉のイントネーションや抑揚に準じず、リズムとハーモニ

ーのみで作られたり、また語り口調や擬音などを駆使した声楽パートと、「主要モチーフ」を始終奏で音楽の主導権をもつピアノパートは、ただ単なる声楽の伴奏的な存在としての役割をはるかに超えており、まさしく歌（声）とピアノが時には対立するほどの対等な扱いは、彼の文学性と音楽語法の緻密な融合と美学の深さから、宇宙的な壮大なる神秘的な世界観であるといえる。アンコールには、初期の歌曲「3つの歌曲」より「II. ほほえみ」を演奏した。この曲はメシアンが唯一既存の詩をテキストに用いたもので、彼の母であるC. ソヴァージュの詩による。

共演の林千恵子氏は、長年フランス語圏を拠点に現代作品のスペシャリストとして活躍しているだけに、テキストの熟知さとフランス語のネイティブな発音と語感、また音楽性の高さに多くの刺激を受けることができた。また今回は「詩と音楽」を聴衆の方々に直に感じて頂きたいとの願いから（特にメシアンのテキストがあまりに難解であるため）私自身初の試みとして日本語訳詞を字幕にて投影した。そのため「作品の内容がダイレクトに感じられた」またメシアンについては、どうしても敬遠されがちな現代の分野ではあるものの「彼の壮大な世界観を感じられ、多くの発見と貴重な体験だった」などの声が多く寄せられたのは何よりであった。そこには訳詞をして頂いたフランス哲学・文学者の澤田直氏の原文に近く忠実で自然な滑らかさをもつ言葉の力も大きい。演奏については、かなりの研究成果をあげることは出来たように思うが、演奏上の細やかな面や反省点、さらなる深い理解と実感を得るには、まだまだかなりの時間を要するものである。しかし、私にとってフォーレの後期連作歌曲は初めての体験であ

り（少なくともフォーレのピアノ作品は私のレパートリーではない）、特に「ハラウイ」は作品の規模の大きさや難解さと共演者などの関係から容易に取り上げることの出来ない曲だけに、地元大阪で上演できたことの意義が大きか

ったように思われる。最後に、この演奏会開催に際して相愛学園、関西音楽業界、音楽スタッフ等の関係者各位のご尽力に心からの感謝を申し上げます次第である。

相愛大学特別演奏会助成公演

ハラウイ ～愛と死の歌～

稲垣 聡 [ピアノ] & 林 千恵子 [メゾ・ソプラノ]



©相愛大学



2017年 3月 6日 (月)

開演 19:00 / 開場 18:30

あいおいニッセイ同和損保

ザ・フェニックスホール

入場料：一般3,000円 / 学生1,500円 (全席自由)

[チケット取り扱い]

ザ・フェニックスホール チケットセンター

TEL 06-6363-7999 *土・日・夜を除く平日10:00～17:00

カンフェティチケットセンター

<http://www.confetti-web.com/>

TEL 0120-240-540 *平日10:00～18:00

(ご予約後、セブンイレブンにてお引き取り頂けます)

[ご予約・お問い合わせ]

おふいすべが TEL 0798-53-4556 *平日10:00～18:00

<http://office-vega.net>

Program.

R. ワグナー = F. リスト

R. Wagner = F. Liszt

楽劇「トリスタンとイゾルデ」より
「イゾルデの愛の死」(1857-59/1867)

"Isoldes Liebestod" aus "Tristan und Isolde"

(ピアノ独奏版)

G. フォーレ

G. Faure

イヴの歌 op. 95 (1906-10)

La chanson d'Eve op95

O. メシアン

O. Messiaen

ハラウイ～愛と死の歌～(1945)

Harawi - Chant d'amour et de mort -

(日本語字幕付)

主催 **SOAI** 相愛大学
SOAI UNIVERSITY

制作協力 **おふいすべが**

相愛大学人間発達学部発達栄養学科

高齢者食支援セミナー

「大阪市イノベーション創出支援補助金」
による産官学連携の取り組み
「誤嚥（ごえん）を防ぐために！！
食事と口腔ケアから」

【はじめに】

超高齢化社会を迎え、我々は、要介護・要支援高齢者に対する食と健康という深刻な問題に直面している。特に本学が立地する住之江区では、2045年には、65歳以上の高齢化率が45%を超えると予測され、大阪市内でも特に少子高齢という点で超高齢化地域となる。

そのような現状の中で、本学科が、新田ゼラチングループ（株）ニッタバイオラボ（代表取締役 小田義高氏）とこれまで取り組んできた、高齢者でも安全に摂食でき、栄養改善にもつながるゼラチンやアガーなどの「ゲル化剤・とろみ剤」を用いた商品開発および基礎研究が認められ、大阪市イノベーション創出支援補助金（平成29年4月募集）の採択事業に選ばれた。

（詳細は、<http://www.city.osaka.lg.jp/keizaisen-ryaku/page/0000406276.html> 参照）

本稿では、大阪市イノベーション創出支援補助金による産官学連携の取り組みとして行った高齢者食支援セミナー「誤嚥（ごえん）を防ぐために！！ 食事と口腔ケアから」について報告する。尚、本セミナーは前年度開催した発達栄養学科公開シンポジウム“～身近な病気「認知症」への理解を深めるために～今日からできる・だれでもできる認知症予防”からの継承である。

【実施内容概要】

- (1) 開催日時：平成29年10月15日（日）
10:00～12:00
- (2) 開催場所：相愛大学 クマルーム
- (3) 参加者数：大阪市住之江区等に居住の高齢者62名
- (4) 主催：相愛大学
- (5) 共催：株式会社 ニッタバイオラボ
- (6) 後援：大阪市住之江区区役所
- (7) 協力：（社福）大阪市住之江区社会福祉協議会、さきしま地域包括支援センター
- (8) 内容：コーディネーター：発達栄養学科
講師 古川 和子
 1. 開会挨拶：発達栄養学科
学科長 教授 角谷 勲
 2. 講義「誤嚥（ごえん）を防ぐために！～口腔ケアの基礎知識～」
講師 発達栄養学科
教授 歯科医師 品川 英朗
 3. 体験「学生による最新情報レポ～笑いヨガで口腔内も潤う！？～」
発達栄養学科3回生 3名
 4. 講義「ゼラチン、アガーの紹介～おいしく、栄養補給！～」
（株）ニッタバイオラボ 代表取締役
小田 義高
 5. 試食と嚥下（えんげ）障害対応食へのアドバイス
「（株）ニッタバイオラボとのコラボによる学生が開発した美味しいスイーツ」
講師 発達栄養学科
准教授 管理栄養士 竹山 育子
講師 管理栄養士 杉山 文
 6. 口腔乾燥状態および口腔内細菌数の検査
・相談コーナー、骨密度測定

(9) セミナーの様子：



進行担当：発達栄養学科 古川和子



開会挨拶：発達栄養学科長 角谷勲



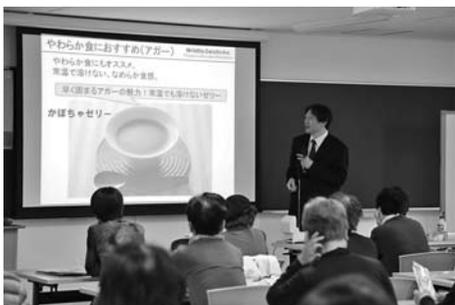
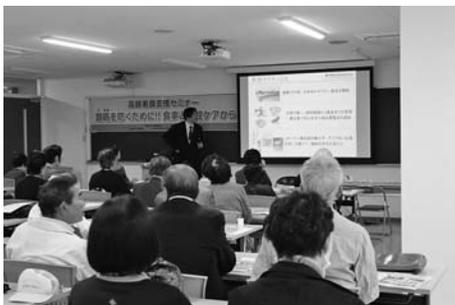
講演：発達栄養学科 品川英朗



住之江区在住の高齢者の方々が会場は満員！



体験：「発達栄養学科3回生による最新情報レポ～笑いヨガで口腔内も潤う!?～」



講演：株式会社ニッタバイオラボ
代表取締役 小田義高



誤嚥予防を目的としたウェルカムドリンク「梅酒、日本酒、甘酒」3種類のゼリーの試飲



試食：「(株) ニッタバイオラボとのコラボによる学生が開発した美味しいスイーツ」
発達栄養学科 杉山文



講演：嚥下障害対応食へのアドバイス：
発達栄養学科 竹山育子



栄養と摂食嚥下を考慮した「学生が開発した美味しいスイーツ」(おからチョコケーキ、かぼちゃ白玉ぜんざい)



希望者に対する骨密度の測定

(10) 高齢者食支援セミナーパンフレット（別ファイル）

相愛大学 相愛大学
「大阪市イノベーション創出支援補助金」による
産官学連携の取り組み

高齢者食支援セミナー

誤嚥を防ぐために!! 食事と口腔ケアから

生涯にわたり、口から食事を摂取し続けるためには、口腔ケアも含めた総合的な食へのサポートが必要です。
このたび、相愛大学と(株)ニッタバイオラボの共同によるセミナー
「誤嚥(ごえん)を防ぐために!! 食事と口腔ケアから」を開催いたします。
地域の高齢者のみならず、ぜひご参加ください。

日時 平成29年10月15日(日) 10:00~12:00

場所 相愛大学 クマールーム (地下鉄ニトウ山「ボートタウン」東階段下車 徒歩約5分)

定員 70名 (住之江区在住高齢者及びそのご家族)

申込方法 ホームページから申し込みフォームに、必要事項を記入の上、お申し込みください。
※お寄せいただいた個人情報は、個人情報保護法に準拠の事業に活用し、目的以外の使用いたしません。

申込締切 10月5日(木)締切 ※応募多数の場合は抽選にて決定いたします。

決定通知 10月10日(火)頃に、当選された方へのみ決定通知を発送させていただきます。

お問い合わせ 〒559-0033 大阪市住之江区南港中4-4-1 TEL.06-6612-6213(内線436)
相愛大学 人間発達学部発達栄養学科 臨床栄養研究室

講師「誤嚥(ごえん)を防ぐために!!~口腔ケアの基礎知識~」
講師 相愛大学人間発達学部発達栄養学科 教授、専科医師 品川 英樹

体験「学生による最新情報レポ~笑いヨガで口腔内も潤う!?~」
試食と嚥下(えんげ)障害対応食へのアドバイス
「学生が開発した美味しいスイーツ」
~ぜひ味わってください!お楽しみに!~

講師
相愛大学人間発達学部発達栄養学科
准教授、管理栄養士 竹山 青子
講師、管理栄養士 杉山 文

(株)ニッタバイオラボ
代表取締役社長 小田 義高

試食メニュー
あから
夢ヨヨーキ
お昼ちや
白玉あんぱん

ニッタバイオラボ
との
コラボレシピ!

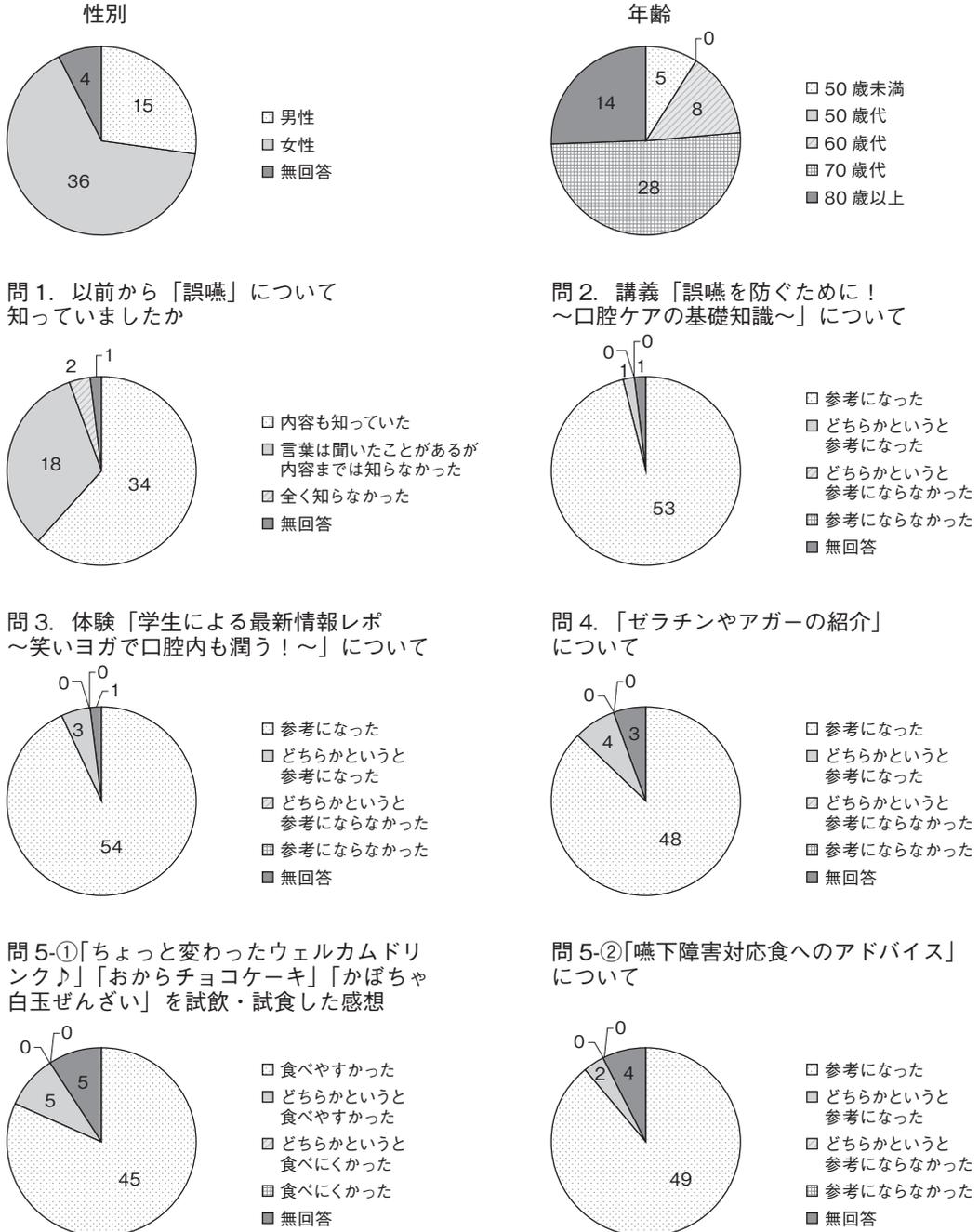
※希望者には、口腔状態評価および口腔内細菌叢の検査を無料で行います!

① 相愛大学人間発達学部
② (株)ニッタバイオラボ
③ 大阪市住之江区役所
④ (社福)大阪市住之江区社会福祉協議会、さきしま地域包括支援センター

(11) 高齢者食支援セミナー アンケート集計結果：(別ファイル)

高齢者支援セミナー「誤嚥を防ぐために！食事と口腔ケアから」

参加者アンケート結果 H29年10月15日実施 55人回答／62人



(12) 高齢者食支援セミナー 参加者のご意見
「誤嚥を防ぐために！～口腔ケアの基礎知識～」
について

- ・言葉で知っていたがどんなものか知らなかったのでもっとも参考になった。
- ・すぐに実行したい。
- ・笑いヨガの知識はあったが、実際にやってみると楽しく普段の生活でも取り入れようと思った。
- ・あいうべ体操、笑いヨガなど口腔ケアの必要性を改めて感じた。
- ・口の中に細菌がそんなに多いとは初めて知った。
- ・先日家で誤嚥して苦しんだ。
- ・高齢者の方のリハビリとして非常に参考になった。
- ・大変わかりやすく参考になった。できるだけ今後実施していきたい。
- ・マッサージの仕方がよく分かった。毎日実行したい。
- ・口のケアが大事であることがよく分かった。心がけたいと思う。

「学生による最新情報レポ～笑いヨガで口腔内も潤う～」について

- ・これから毎日実行したいと思った。
- ・笑うことはとても大切だと思った。老人会の食事会などで皆でやってみようと思う。
- ・両親の介護は終わったが、もし知っていたら一緒にやってみたかった。
- ・習慣にできればいいのにと考えた。
- ・笑いは最高のものと分かっていて実行していない、改めたい。
- ・学生さんにつられて久しぶりに大声で笑った。
- ・すごく参考になった。学生の笑顔がステキ

- ・学生さんと一緒なのでとても楽しくできました。家でも1日1回したい。

「ゼラチンやアガールの紹介」について

- ・ゼラチン、ペプチドなどの分類区分が理解できてよかった。
- ・高齢者にとってとてもいい物だと知った。これから使用したいと思う。
- ・毎日の食事に色々取り入れたいとおもった。
- ・ゼラチンについての知識が増えた。普段の生活に取り入れたい。
- ・とろみ剤との違いを知りたい。同じような使い方ができるといいのですが・・・。
- ・薬を飲むときのゼリーとして使用してみたいと思う。

「ウェルカムドリンク♪」「おからチョコケーキ」「ぜんざい」を試飲・試食した感想

- ・食べやすくおいしかった
- ・梅酒は、スイーツ感覚で良かった。スルッと飲める（食べられる）。
- ・おからチョコは、しっとりとやわらかく食べられる。白玉ぜんざいは、なめらかで安心して食べられた。
- ・おからケーキはもう少し甘味があってもいいと思った。白玉ぜんざいはとても美味しかった。
- ・みんなおいしかった。レシピを参考に作ってみたい。
- ・高齢者の台所環境や独居という視点をも含めた手早く、安全、格安な手作りレシピも次回に期待する。
- ・ウェルカムドリンクは口あたりが良かった。
- ・ウェルカムドリンクはゼリー状のアルコールを初めて飲んだが、思ったより飲みやすかつ

た。

「嚥下障害対応食へのアドバイス」について

- ・高齢者の誤嚥による肺炎死が多発する中、工夫するためのヒントがありがたかった。
- ・92歳になる義母と暮らしているので、ぜひ参考にさせていただきたい。
- ・良く理解できた。
- ・よくむせることがあり、色々と参考になった。

その他感想

- ・知らないことがたくさんあり、今日はとても参考になり楽しかった。
- ・ゼラチンに効果があることを知った。これから使っていきたいと思う。
- ・品川先生のお話が大変良かった。とても生活に役立つ講座だった。
- ・いたれりつくせりでお世話いただいたスタッフの方々に感謝している。
- ・口腔ケアをまめに続けていくことが大事だと思った。
- ・よく分かった。また参加したい。
- ・おもしろくないのに笑うのは苦痛だったが笑いヨガは楽しく、体が温かくなった。
- ・母が、誤嚥があって気にかかっていた。そのため今日の話聞いて大変参考になった。

【おわりに】

「地域に求められる大学」を目指した取り組みの一環として、今回、住之江区等に居住の高

齢者および食生活改善推進員の皆様を対象とした「高齢者食支援セミナー」を実施した。本セミナーは、新田ゼラチングループ（株）ニッタバイオラボと発達栄養学科が産学連携のプロジェクトとして取り組んでいる「レシピ創造プロジェクト」を基に企画・立案されたものである。さらに本取り組みは、大阪市イノベーション創出支援補助金事業にも採択され、今回、行政も含めた産官学連携の取り組みとしての開催に至った。

超高齢化社会を迎えている現状の中で、様々な問題が生じているが、特に「食と健康」に関する問題が深刻化してきている。昨年の発達栄養学科公開シンポジウム「認知症予防」に引き続き、「誤嚥（ごえん）を防ぐために」という、より具体的なテーマで開催したこともあってか、その関心の高さを目のあたりにした。アンケートの評価等からも、地域社会への貢献の一環として、本セミナーを行った意義が十分にあったと考える。地域に開かれ、地域に求められる大学を目指して、今後もさらに取り組んでいきたいと考える。

最後に、本セミナーの開催にあたり、ご協力いただいた住之江区社会福祉協議会の皆様、学外との調整でご尽力いただいた本学小藤一吉総務部長、事務職員の皆様、（株）ニッタバイオラボ代表取締役小田義高様、発達栄養学科の諸先生方ならびに学生の皆様に心から感謝申し上げます。

（文責：品川英朗、杉山文、竹山育子、堀野成代、多門隆子）

平成 29 年度 科学研究費補助金一覧

研究代表

課題	研究課題	研究代表者	
		氏名	所属・職
基盤研究 (C)	音楽経験と知識の度合いに基づく音楽生成システムの利用状況とレベルデザイン	橋田 光代	音楽学部・講師
基盤研究 (C)	アートマネジメント人材育成における共創に向けたコミュニケーション能力の養成	志村 聖子	音楽学部・准教授
基盤研究 (C)	上司小剣に関する研究基盤の構築	荒井真理亜	人文学部・准教授
基盤研究 (C)	基地配備をめぐる社会学的研究－南西離島における基地建設と地域的記憶－	藤谷 忠昭	人文学部・教授
基盤研究 (C)	幼児教育保育における食育の実践的指導力を評価する指標の構築	進藤 容子	人間発達学部・教授
基盤研究 (C)	保育所保育士による保育ソーシャルワークの可能性と養成教育のあり方に関する研究	直島 正樹	人間発達学部・准教授
基盤研究 (C)	保育者養成課程で保護者支援を実践できる力をもつ保育者を養成する教育方法の研究	中西 利恵	人間発達学部・教授
基盤研究 (C)	児童養護施設に入所する外国につながるのある子どもの支援に関する研究	松島 京	人間発達学部・准教授
基盤研究 (C)	MRI 動画記録法を用いた口腔咽頭領域での嚥下調整食・とろみ食の流動評価	品川 英朗	人間発達学部・教授
基盤研究 (C)	担子菌類に含まれる複合脂質成分の解析と腸管免疫および全身性の免疫賦活作用の検討	庄條 愛子	人間発達学部・教授
基盤研究 (C)	言語教育における地域語・国語・国際語の関係性に関する比較的研究	長谷川精一	共通教育センター・教授
若手研究 (B)	養護教諭に新時代に対応する高い専門性と実践力をつけるための新科目「養護学」の構築	横島三和子	人間発達学部・准教授

研究分担

課題	研究課題 (研究代表者)	研究分担者	
		氏名	所属・職
基盤研究 (B)	音楽演奏表情データベース PEDB の拡充とその実践的活用 (関西学院大学・片寄晴弘)	橋田 光代	音楽学部・講師
基盤研究 (C)	日本近代文学と絵画のジャンル横断的交流に関する総合的研究 (東海大学・出口智之)	荒井真理亜	人文学部・准教授
基盤研究 (C)	保育者養成課程で保護者支援を実践できる力をもつ保育者を養成する教育方法の研究 (相愛大学・中西利恵)	曲田 映世	人間発達学部・助教
基盤研究 (C)	担子菌類に含まれる複合脂質成分の解析と腸管免疫および全身性の免疫賦活作用の検討 (相愛大学・庄條愛子)	水野 淨子	人間発達学部・教授

平成 29 年度 外部団体よりの受託研究、共同研究及び教育研究奨励寄付金

受託研究

助成団体	研究課題	研究代表者	
		氏名	所属・職
兵庫県三田市	食に関する市民意識調査に係る研究	進藤 容子	人間発達・教授

共同研究

助成団体	研究課題	研究代表者	
		氏名	所属・職
大阪市・(株) ニッタバ イオラボ	実用化に向けた「ゲル化剤・とろみ剤」を用いた商品開発	品川 英朗	人間発達・教授

教育研究奨励寄付金

助成団体	研究課題	研究代表者	
		氏名	所属・職
(一般社) 桐山奨学会	食育推進キャンペーンによる地域の子どもたちへの食育活動	村井 陽子	人間発達・教授
(一般社) 全国栄養士養成施設協会	相愛大学学生が行う食育推進キャンペーン	多門 隆子	人間発達・教授
(一般社) 栄養改善普及会	第 13 回みんなで考える朝食教室 (ヨーグルト)	竹山 育子	人間発達・准教授
大阪厚生信用金庫	CO-SEI チャリティコンサート	中谷 満	音楽学部・教授